

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ11章16-33節>
パウロの福音理解の深さを覚えさせられる個所。誇ることを巡って。

1 (16-20) 偽使徒(13)に振り回されるコリントの信者たち。

偽使徒が「肉に従って誇っている」(18)のに、その良し悪しを判断できないで振り回されているコリントの信者たちにパウロは驚いています
「奴隷にされても、食べ物にされても、～」(20)。キリスト者となってもこの世的な判断基準から完全に解放されるためには時間がかかる、ここを読んでそう思われます。これに対してパウロはこの後何をどう語って行くか、それに注目することがこの問題を解く鍵です。

2 (21-29) 誇りの内容が問題なのではない。誇ること自体が不要!

ここを読むと、偽使徒が①自分たちは神の民ユダヤ人の中でも聖書を特に深く理解している(22 多分、エルサレムから来た)、②キリストを救い主として宣べ伝えている(23)、この二点でもってコリントの信者たちが彼らを受け入れ、何があっても「我慢している」(20)ことが分かります。それに対してパウロが、「そんなことを言うなら、自分は彼ら以上にそうだ」と言い返し気味に語った内容が列挙されていますが、ここを読むときに大事なことは、パウロは本当は「そんなことはどうでもいいことだ」と思っているということです(フィリピ3:18)。キリストのためのパウロの多くの苦しみ、それこそが真の誇りの内容だと思いかもしれませんが、それもパウロがここで言いたいことではありません。パウロにとっては、誇りの内容が問題なのではなく、誇ること自体が今や不要なのです。なぜか? 神様の前で自分の罪深さに打ちのめされ、その自分を赦して生かして下さるために十字架にかかって死んで下さったイエス・キリストを知ったからです(フィリピ3章全体)。

3 (28-29) 誇ることから解放されて行くときに起こること。

パウロは教会で起こるやっかい事、弱っている人、つまずいている人のことを心から気にかけています。これは誇ることから解放されて行く時にできることではないでしょうか?! 自分や他者を見ることより、赦しの神を見て生き出したからです。そして教会とはそういう所なのです。キリストによる救いを知ったがゆえに、誇ることを持たなければならぬという考え方から少しずつ解かれ、さらにそこに神様が用意して下さった生き方をしていきたい、そんな世界を築いていきたいと思う者が集まる所だからです。聖書の信仰から得られる大きな幸いです。